はじめに

妊娠経験は医療技術の進歩によって日々変化している。それは、女性が妊娠・出産すること、中絶すること、そして子どもをもつこと／もたないことの意識に、影響しているのではないか。そんな疑問から、女性の妊娠経験を知り、検討する必要があると考えた。妊娠はつねに出産に至るわけではない。流産、死産、人工妊娠中絶の経験についても知るために、「出産」ではなく「妊娠」に焦点をあてることにした。この調査のもうひとつの目的は、「出生前検査」が女性の妊娠経験にいかに影響を与えているかを知ることである。出生前検査とは胎児に疾患や障がいなどがあるかを調べる検査の総称である。ただ、胎児に重い疾患があるとわかっても、出生前も出生後も治療は限られている。また、疾患や障がいの具体的な状態は、出産前には限定的にしかわからない。そんな中で、女性は、検査を受けるかどうか、検査結果を受けて妊娠を継続するか中絶するかという選択を迫られている。出生前検査をめぐる経験についての調査は多くない。そこで、出生前検査の経験を含めた妊娠の経験の詳細を知り、それらの課題を検討するために、2003年に「妊娠と出生前検査の経験についての調査」を実施した。それから10年を経て、出生前検査の技術は進展し続けている。そのために、2013年に、2003年調査と同様の質問を含むアンケート調査を実施した。本報告書では、2013年調査の集計結果を中心に報告する。